

葛布の話: 掛川葛布産業の歴史とその継承に向けて

小崎隆志 (小崎葛布工芸株式会社)

聞き手 伊藤幹二 (NPO 法人緑地雑草科学研究所)

はじめに

浜松から掛川あたりにクズが猛威をふるっており、住宅地にも侵入し大変な問題になっている。住民の話を聞くと、浜名湖花博が開催された 2004 年以降に急激に増えたいらしいという。ついては、クズの繁茂・蔓延を題材に番組を作りたいので話を聞きたいと NHK の TV 制作者の取材を受けたのが二年前 (所さん大変ですよ ‘緑の怪物’ 2016 年放映済み)。そして、NPO 法人緑地雑草科学研究所の「雑草・ヒト・環境」シンポジウムでクズを取り上げることになり、掛川にある手織葛布の製造と販売を営んでおられる小崎隆志社長を紹介され、葛布の講演を依頼し快く引き受けていただいたのが 1 年前。その時まで、クズと掛川に因果関係があるなどとは思いませんでしたが、現在の雑草化したクズは、かつて、列島の繊維・衣料文化を担った遺存作物であることを確信しました。そして、「葛からクズへ：日本古来の有用植物がいま強害雑草に」の講演内容を ‘草と緑’ 特集号として発刊することになり、氏の「葛布の話」の執筆を依頼しましたところ、対談と提供資料を基に NPO 法人緑地雑草科学研究所が文章化することで OK が出ました。本稿は氏との対談、聞き取り、関係資料を基に編集したものです (以下文責 伊藤幹二)。

1. 葛布の話

- そもそも葛布とはどのようなものなのですか？

葛糸で織った布、緯糸 (よこいと) も縦糸 (たていと) も葛糸で織った布ということになりますが、普通には縦糸に綿糸または絹糸を合わせて織り上げたものを葛布 (くずぬの、くずふ、かつぶ) と呼んでいます。このような植物の内皮 (靱皮繊維) を原料にして織った布を草木布 (そうもくふ) といいます。先史時代から作られていたようです。また、クズ、カラムシ、シナノキ、カジノキ、バショウなど多様な素材で織られた布を古代布とも呼称しています。このうちクズ、シナノキ、バショウからとった糸で織られたものを 3 大古代布と呼んでいます。

- いつの時代に、葛を衣料にするようになったのですか？

正確にはわかりませんが、葛布の利用は古く、中国呉県の遺跡で見つかった葛布がアジア最古の布と云われています。中国古典の漢書や中国最古の詩集に、葛衣の記載があり、

Ozaki, Takashi* and Ito, Kanji**: A story of kudzu fiber textiles: the past, present and future of Kakegawa crafts.

(*Ozaki Kuzufu Kougei Co., Ltd. E-mail: ozaki@athena.ocn.ne.jp; **Institute for Urban Weed Science. E-mail: microforest@yk2.so-net.ne.jp)

周の時代（紀元前 1046 年頃～紀元前 256 年）には衣服として用いられていたようです。日本では古墳時代前期の鏡に付着した葛布の出土が最古のものとされています。927 年発行の「延喜式」に全国の男子の税金として、絹、麻、葛、苧麻などの織布を納めさせていることからしても、この時代にはすでに栽培・生産技術はもちろん、織物技術や布は全国に広まっていたと考えられます。

- 葛布の材料のクズ蔓とはどのようなものですか？

クズはどこにでも生えていますが、クズ蔓の質はいろいろで、上質の繊維がとれるクズ蔓は限られています。いいクズ蔓がとれる場所は、毎年決まっています。ちゃんと管理がされています。立ち木などに巻き付いたクズからはよいクズ蔓はとれません。草地（地面ではない）を這っている状態のクズ（這い蔓）が良いクズ蔓といえます。クズ蔓の採取者は、そのような場所を何か所か熟知しており、毎年集めて回ります。クズ蔓は、山野に自生しているものを採ってくれば、簡単に繊維がとれると思われていますが、山野に自生しているクズを這い蔓に仕立てる「手入れ」がなければ繊維用の蔓にはならないのです。

- クズ蔓はどのように採取されるのですか？

良質のクズ蔓を採取にはいくつかの条件があります。まずは、当年枝（新茎）であること、これは木化の進んだ前年までの茎からは繊維が取れないからです。また、長く伸びている部分の前年茎から発生した当年茎からも良い蔓は取れません。良質のクズ蔓を得る鉄則は、株の頭から直接発生しているか、頭に近い部分の前年茎から発生している蔓を採取することです。しかし、このようなクズ蔓は自然に任せては出来ません。古い茎などを刈り取り、勢いある這い蔓の発芽を促進させる手入れされたクズ蔓を採取するのです。採取時期は、5 月下旬から 6 月下旬までに刈り取られる当年最初に発芽した「一番蔓」と呼ぶもの、一番蔓の刈り取り後に発生した蔓が「二番蔓」、その後に発生した「三番蔓」まで刈り取ることが出来ますが、繊維部分の収穫量は落ちます。なんとといっても、良質のクズ蔓は夏の土用前に刈り取ったものです。

- 誰がクズ蔓を採取するのですか？

今日のクズは自生しているのでいつでも誰でも採取できるように思えますが、掛川でも昭和の初期までは、草地利用において共益慣行（入会地、共有地）があり、茶畑用の青草刈り取り時期とクズの刈り取り時期が決められていました（口開けの制度）。クズの口開けは毎年 5 月 25 日で、一番蔓を一斉に刈り取ったとされます。このことは、クズとイネ科草本の半自然草地が、毎年、火入れと鎌によって萌芽更新や刈り取り（整枝）更新の共益慣行作業が行われていたことを意味します。いずれにしても、立ち蔓と呼ぶ草や立ち木に絡まって生育しているクズ蔓や放任されたクズ蔓からは繊維は取れませんが、そのようなクズはかつての掛川の里地里山にはほとんどなかったでしょう。

さて、クズ蔓刈り作業は、農家の農間期（農閑期ではない）の仕事だったのですが、実際のところこの時期は、田植え、夏作物の作付け、茶摘み、果樹の摘果、除草作業に農薬散布作業など、農繁期そのものなのです。クズ蔓採取地の手入れや蔓刈り作業どころではなかったようです。

- 採取したクズ蔓はどうするのですか？

だいたい2~3メートルに伸びた蔓を刈り、蔓の根の方から先端に向かって葉をこき下ろし、葉柄を残して葉だけを取り除きます(図1-A)。蔓が一握りになるぐらいで、元を揃えて蔓で縛ります。束にした蔓は丸い輪にして数か所を括っておきます。蔓束の乾燥を防ぐため直射日光を避け、菰や青草で覆うか、水中に入れておく場合もあります。以上が製芋用(せいお)のクズ蔓の採取作業となります。

- 良質なクズ蔓の確保が最も大切であることは良くわかりました。

- それでは、クズ蔓はこの後どうするのですか？

製芋とは、クズ蔓から繊維を取り出すことですが、取り出した繊維を葛芋(くずお)といいます。この繊維を得るまでの工程を葛芋仕上げと呼びます。最初は、釜入れとよばれる蔓を均等に煮沸し(図1-B)、その後、流水に一晩浸す、水漬けとよぶ作業を行います。そして、刈り取った青草(イネ科草本類)が敷かれた地面の中の床室に、先の蔓を寝かしその上を青草で覆います(図1-C)。この作業を床入れといい、クズの外皮と木質部が容易に剥がすために行う発酵処理で、二昼夜ほど寝かします。これを取り出し外皮(表皮)を川で洗い流します。いよいよ芯抜き(抜き揃え)、蔓の芯(木質部)を引き出す作業です。残った繊維部分(内皮)を川の流れて丁寧洗いします(図1-D)。最後に、繊維の湯垢を取り除くため一晩米のとぎ汁に浸した後、仕上げ洗いをし乾燥させます。これを葛芋干し作業といいます。この乾燥させた繊維束を「葛芋」と呼び、完成品の繊維素材として織元に売られます。

- 葛芋からどのようにして葛布になるのですか？

葛芋から、1本の糸に仕上げるまでの作業を「葛績み」と「葛つぐり」といいますが、葛績みは葛芋を細かく裂きその端を結び合わせる糸造り、そして、葛つぐりとは、その糸を8の字に糸を巻きあげて機織り用に仕上げることなのです(図2-A)。この葛つぐりを緯糸(よこいと)にして織られたのが葛布です(図2-B,C)。

- 葛布はどのような衣類に使われていたのですか？

葛布の衣類が歴史的に認識されるのは鎌倉時代あたりからです。武士や公家の着衣として発展したと思われ。知られているものを挙げると、袴(かみしも)、袴(はかま)、陣羽織、乗馬袴、狩衣、道中着、合羽、火事羽織などがあります。江戸時代には諸大名のお土産品として宿場町掛川の葛布は最高級品としてたいそう人気があったようです。葛布地(反物)か完成品かは定かではありませんが、おそらく反物(着尺)だったのでしょう。一方、庶民の衣服にも葛糸は、カラムシ、コウゾ、シナノキ、アサ、木綿など他の植物繊維と共に広く使われていたでしょう。

- 葛布の特徴とはどのようなものですか？

一言でいえば、その独特の光沢です。他の織布にない微妙な色調が好まれる理由でしょう。そして、蔓の材料と糸づくりまでの工程の違いによって、色々な風合いの布が出来ることにもあるでしょう。もちろん、丈夫で長持ちもありますが、その素朴な自然素材で織られた布という希少性が評価されているのではないのでしょうか。

- 葛布地が使われている商品はどのようなものですか？

昔は蚊帳などにも使われていましたが、現在は、財布、ハンドバック、手提げ籠、扇子、

団扇，花台敷，草履など小物民芸品，掛け軸，壁掛け，すだれ，シェード，襖紙，壁紙，カーテン，座布団や和風つい立などのインテリア民芸装飾品，そして帯地や着尺，洋服など服飾品が販売されています（図 2-D）．今や，葛布地の手織元は 2 軒だけになりましたが，伝統工芸品を次代に継承していくために頑張っています．

- これからの葛布事業をどうお考えですか？

掛川市の伝統産業である葛布が危機的状況にあります．葛布産業の復活，継承に向けて，平成 28 年に掛川市葛布活用委員会が設立されました．委員会の活動計画と掛川市の取り組みについて資料がありますので，何かご意見をください．

- 委員会の事業計画案と市の取り組みを拝見しましたが，全体の方向性が見えません．

どのような点ですか．私も委員なので，良い方向に進めるためにも参考にしたいと思います．

- 個々の利活用は手段であって，肝心の目的がはっきりしていないようですが．

葛の利活用が目的と考えていますが，それがおかしいということですか．

- 現在の掛川のクズ資源をどう考えるかが一番重要だと思いますが．

葛の個々の利活用は手段であって，目的は掛川のクズ資源をどのように活用・管理していくのかということですか．クズの栽培試験なども試みていますが．

- そうです，現在の里地里山のクズをどのように活用していくのが課題だと考えます．

そのためにも，一度，掛川の葛布産業の歴史について振り返って見る必要があります．なぜそのようなことが必要なのですか？

- 現在，クズに関するデータは日本にも米国にも無数にあります．しかし，それらを活用するには産業史を知ることが大切です．目的とか課題とかはそこからしか生まれません．

葛布の歴史ではなく，掛川葛布産業の歴史ですか？ 掛川葛布産業のたどった道を整理してみましょう．

2. 社会経済的背景と掛川葛布産業の変遷

- なぜ葛布産業が衰退したのでしょうか？

明治に入り，掛川藩のサポートを失った掛川葛布産業は転機を向かえます．政府は養蚕（絹）と木綿の繊維産業を奨励し，国策として行われた栽培技術と加工技術の開発によって，これらの繊維産業は大きく育っていきます．農家はこぞって栽培が安定し換金性の高い農作物の栽培へと向かいます．この中，葛芋の供給がなくなり，葛布の市場性を失ったことで，掛川葛布織元のほとんどが転廃業していきます．危機を迎えた葛布織元は，これまでの着尺（反物）用の織機を改良し，3 尺幅の壁紙（布：クロス）としてアメリカへの輸出に好機を求めることとなります．この自然素材で織られた高級感にあふれるクロスは，大評判となり‘カケガワクロス’のブランド名が付くほど好まれるようになります．カケガワクロスは，外貨獲得の輸出産業として，昭和 30 年代にピークを迎えますが，その時の掛川には 40 件の織屋，7000 人の葛績み手，そして織り手は 1000 人を数えたとされます．しかし，里山の開発や農業就業者の減少から葛芋が不足することになり，韓国からの輸入に頼ることになります．

- カケガワブランドの葛布は、その後どうなるのですか？

輸出最盛期の葛芋の供給は、残っている記録を見ると、韓国からの輸入が約 90%、残り 10%が国内産となっています。葛芋のほとんどを韓国に頼っていたのです。ところが、昭和 37 年、韓国政府は、国策として葛芋の日本への輸出を禁止し、その 2 年後には葛布の輸出も禁止します。葛布壁紙の市場は韓国製にとってかわられ、日本の市場占有率は激減することになります。

- 掛川葛布産業に影響した基本問題とは何でしょうか？

今までの経緯を振り返ると、サプライチェーンの基本、原料の葛芋の生産技術の開発に目が行っていなかったことだと思います。生産技術への投資がなかったというわけです。もう一つは、掛川の土地利用と農業形態が変わり、里山が放置されたことにあるのかもしれない。いずれにせよ、原料は外国まかせだったことです。

3. 葛布を伝える

- 掛川葛布産業の基本的役割とは何でしょうか？

掛川の自然資産を生かすことによって、長年にわたって築き上げてきた農業文化と伝統工芸文化をつなぎ合わせ、経済的かつ持続可能な手法によって改善、向上していくことだと考えています。そして、次代にこの伝統を継承していくことも大切な役目だと思います。

- 掛川葛布事業のポテンシャルとは？

カケガワクロスだけでは人は呼べませんが、クズを活用し栄える世界で唯一のまち、KAKEGAWA! なら、世界の関心を呼ぶことが出来るでしょう。そのためには何が大事なのでしょうか。

- 私見ですが、採取したクズの化学分析や加工、育苗や植栽などは誰にでもできますが、里地里山に自生するクズを活用するには、萌芽更新技術と整枝剪定技術などクズの生理生態に基づいた知識が必要です。そして、目的部位を効率的に収穫するためには仕立て方を工夫することが大切です。自生のクズを制御・利用できてこそ、お茶と葛のまち掛川に、日本の自然文化遺産と呼べる里地里山景観が継承されるのではないのでしょうか。非常に興味あるお話だと思います。

- なお、個人的な印象ですが、葛蔓の育成はブドウ栽培とよく似ています。人々は、葡萄酒を見に来るのではなく、ブドウ園やワイナリーを見学し、そして葡萄酒を楽しむのです。

掛川の自然資源は、葛と草地景観だということですね。

- 最後になりましたが、葛芋 100kg を得るにはどれだけのクズ蔓が必要ですか？

計算したことはありませんが、100kg の生蔓から約 2.5kg 程度の葛芋が取れるようです。この 2.5kg の葛芋からは約 2kg の‘葛つぐり’が得られます。ということは、100kg の葛芋に 4 トンの生蔓が必要だということです。4 トンの生蔓を得るにはどれだけの面積が必要かは分かりませんが、数ヘクタールかと思います。そのへんのところはよくわかりません。

- 以上で対談は終了しますが、少し、NPO 法人緑地雑草研究所の活動についてお話させて

ください。

クズや雑草を専門的に管理する会社があるとは知りませんでした。大学の農学部には雑草学の研究室があることや雑草に関わられる博士が多数おられることなども初めて聞きました。クズに関わられている人たちの多様さにも驚きましたが、正直、勉強になりました。有難うございました。

- 有難うございました。



図 1 繊維を取り出す



図 2 葛布を織る